

# 長崎原爆の戦後史をのこす会編 『原爆後の75年——長崎の記憶と記録をたどる』

長野 秀 樹

本書は大きく、第1部「聞き取り調査報告」と第2部「資料調査報告」の二部構成となっていて、さらに1部は1「被爆前後」、2「被爆者5団体」、3「被爆者運動・平和運動・平和行政」、4「証言・記録運動」、5「被爆者調査」、6「平和教育運動」と分けられ、それぞれに「ガイド」と「解説」が付されている。聞き取り調査の対象は述べ三四人に及んでいる。

第2部は1「資料調査」2「主な資料群」に分けられて、長崎原爆関連資料を所有する各種団体、たとえば長崎原爆資料館、岡まさはる記念長崎平和資料館、長崎県被爆者手帳友の会、長崎市婦人会、など一四六の組織、団体に行なった資料調査アンケートの結果報告とそれらの主な団体の資料の状況報告である。

2「主な資料群」では渡辺千恵子氏関係資料、鎌田定夫、鎌田（旧姓川崎）信子夫妻関連資料、内田伯氏関連資料や、長崎原爆被災者協議会資料調査の報告がなされている。

表題が「原爆後の75年」というように、その軸足は被爆体験そのものより、被爆体験の継承、反核運動・平和運動といった被爆後の長崎における七五年という時間における活動を総体として確認、検証することにあると言って良い。被爆体験そのものの記録は本書でも繰り返し述べられる『長崎の証言』（長崎の証言の会）をはじめ、職場、地域、各種団体ごとに様々にまとめられている。

しかし、それらの記録がまとめられた経緯、あるいは始められたきっかけについての記録は意外なほど少なく、未整理のものが多くと述べられる。例えば、被爆者の当事者団体としての被爆者五団体（長崎原爆被災者協議会（被災協・一九五六年結成）、長崎原爆遺族会（遺族会・一九六〇年代結成）、長崎県被爆者手帳友の会（友の会・一九六〇年代結成）、被爆者手帳友愛会（友愛会・一九七九年結成）、長崎県平和運動センター被爆者連絡協議会（被爆連・一九七〇年代半ば結成）も「被災協と友の会、被爆連は、その歩みをまと

めた記念誌や会員の被爆体験などを出版しているが、遺族会と友愛会は、そのような出版物を作っていない。さらに、いずれの団体も、事務所の移転などによって設立時からの資料の多くが失われているため、それぞれの団体の設立の経緯や、その後の活動の詳細についても不明な点が多い。

その空白を埋めるために、聞き書きは行なわれたのだが、それでも「設立当時の話を聞くことができたのは被爆連だけで、他の団体は、設立当時のことを直接知っている人はもういない」というのが、被爆から七五年が経過した長崎の現状である。

それでも、設立に関係した人物から、直接的に設立の経緯を聞いた人や、その後の活動に直接かかわった人たちからの聞き書きは可能である。それもまた、長崎の現状であり、どちらにポイントを置くかで、現状の認識は変わってくるのだろう。本書は後者にポイントを置き、今だからできること、今しかできないこととして、当事者の記憶を活性化し、記録を可視化することを目指している。

特に印象に残った三つの聞き書きについて述べたいと思う。

まず、第一は、「被爆者ら団体」の聞き書きである。そもそも、聞き書きは聞き手と証言者との信頼関係と緊張関係によって成立するのだろう。「話す」という行為が「書く」という行為とは違い、一人の空間ではなく、話し手と聞き手という共通の空間の中で成立する以上は、そこに作られる空間が重要であることは論を俟たない。

そして、長崎の被爆者運動を当事者として担ってきた五団体の主要なメンバーの聞き書きにもそうした、共有された空間の大きな効果が見えるように見える。

また、ある目的を持って運動を行なうとき、運動はつまるところ、

人と資金である。この両方がその目的にあったものであれば、運動はその目的を達成することができるだろう。そうした共有された空間でこそ、こうしたある意味で生々しくもなる話題は成立するのだろう。「長崎被災協の現在」を語る田中重光会長は、会費の問題や「被爆者の店」が直営できなくなった現状など資金の問題や、直接的な被爆者の活動が高齢化でできなくなったあと、被爆二世を活動の担い手として、どう育てるかという人々の問題について、真摯に語っている。

「友の会」の元会長で二〇一九年逝去された井原東洋一さんは、市会議員だったこともあり、運動の最前線で、様々な側面を見聞している。例えば「被災協」から「友の会」が分かれた経緯について「前の深堀会長（勝一氏―長野注）はウルトラマンでしたから。それで、手帳友の会を作ったんだと思います」と言い、支部の年間会費が不統一だったり、「机の下を掃除したらダンボールが出てきて、中村副会長と中身をみたらね、お金がはいってたんですよ、7000万円。会長、お金がでてきたと言ったら、ああそこおいとつた」と、というような調子です。もちろん、現金で七〇〇〇万円という額には驚かされるが、それが直ちに何らかの不正につながるというわけでもなかったのだろう。それにしても、オーラルヒストリーの持つ臨場感を実感させられ、運動が資金によって支えられていることが分かる場面である。

その他にも原水協・原水禁・核禁会議といった政党色の強い組織との関係などにも言及し、五団体の現状が、高齢化に伴って、決して楽観できるものではないことを強く述べている。

次に、印象に残ったのは、写真家への聞き書きである。村里榮・

黒崎晴生「証言写真集 被爆者を撮るといふこと」では、それぞれに労働運動に加わり「日本リアリズム写真集団長崎支部」を結成し、それが『写真集 長崎の証言』（一九七〇年）につながっていく経緯が回想されている。

撮影の基本的な姿勢は「相手の気持ちと乖離しないような関係を作」（村里）ることで、撮影者と被写体という関係乗り越える、言わば同志としての関係の構築にあつたのであろう。そうした関係が、山口仙二さんが、風呂に入っているところを撮影し、「使いませんでしたけども、素っ裸の写真は何枚も撮つたり」、「風呂から上がつてひげをそっているのを使わしてもら」（村里）うという関係を築き上げていった。

一方で、そうした関係について、次のように述懐している。

結果的にはそういうことが写真に迫力というのがあるとすれば生まれたいと思うんですけども、今考えると、相当に失礼、非礼なこと繰り返してあつたと思つて反省しているんです。

（村里）

福田須磨子さんとの関係においても同様の述懐を、村里さんは行なっている。福田さんの家に行つて、「だんだん、「上がらんね」「来んね」という風な関係が、短い時間ですけれどもできるようになり、「心を許されたという錯覚を起してしま」つたという。

で、ある時、「須磨ちゃん、そのシャツポを取つてくれんね」つて、私が言つてもかつらみたいな帽子をかぶつて、頭をなかなか出してくれないんで、それを見たい、写真撮りたいと思つて、「須磨ちゃん、シャツポを取つてくれんね」「軽い気持ち、多分軽い気持ちだったんでしょうけども、さりげなく言つた。

そうしたら、しばらく、じつとこう、私の顔を見てて、ぼつりと「うちも女よ」とかつて。その時に「須磨ちゃん」が女であることは百も承知で行つてゐるわけですが、そのことは込められた思い、それほど実感はなかつたんですけれども、彼女を撮ろうかと構えて「うちも女よ」つて言つて、みるみる目に涙があふれてきて、その時、言葉の意味を初めて理解して、もう逆にしびれてしまつて「うわ、もう、写真、撮れない」と思つたんです。（中略）その「うちも女よ」というものに込められた思いというのが、それをほとんど私たちは無頓着にいろんな人たちに取材をしていったんだな、と初めて慄然とする思いになつたんですね。

この聞き書きが行なわれたのが、二〇二〇年八月である。おそらくは撮影から半世紀以上の時間が経過しても、村里さんには痛切な記憶として、この時の記憶が残っている。

撮影者と被写体の関係は、聞き書きにおいても、時として、同じ構造として浮かび上がることがあるだろう。私自身はろうあ被爆者の聞き書きを行なってきたが、手話で被爆体験を語るろうあ者と、手話を読み取り、最終的に日本語（文字）へと変換していく私たちが聞かせる者との間で、ろうあ者の気持ちが、どれほど読み取れているのか、というのは難しい問いとして、今も存在している。

その被爆ろうあ者を被写体とした写真集『ドンが聞こえなかつた人々』（文理閣、一九九一年）の撮影を担当したのが、豆塚猛さんである。豆塚さんも、被写体との距離を意識し、三脚を使用せず、手持ちで「彼らと勝負するためにはもう手持ちで、被写体の存在に負けないように、こちらにも気合い入れて勝負するぞ！つていう、

そんな気持ちで一枚一枚シャッターを切っていました」という。豆塚さん自身は手話ができず、全国手話通訳問題研究会長崎支部の行なう聞き書き活動と共に、撮影を行なっていたが、菊池司さんに聞かしては、通訳者なしで自宅に遊びに行ったりしたという。本書二二八ページには、「豆塚さん撮影の菊池さんの写真が掲載されているが、その顔は「語り部としての彼の顔」であって、その写真には「被爆者として、これから若者たちに被爆体験を語り、彼らは未来に生きるというメッセージを込め」たという。

最後に印象に残ったのは朝長万左男さん「終わらない原爆後障害とともに」である。朝長さんは長崎大学医学部を卒業後、同学部付属原爆後障害医療研究施設（現・長崎大学原爆後障害医療研究所）に入局し、その後も原爆後障害の研究に取り組んでいる。聞き書きの中で、「一番僕にとってショックだったのは、白血病が自分たちと同じ被爆者世代に出始めて、早い人で3〜4年目ぐらい。それからずっと上りなりに、約20年続いたことだ」という。それは「僕らの中学生、高校生時代」だった。

白血病は一九四七年、四八年ぐらいから発病が始まって、「68年ごろには確かに下がってきた」、しかし「68年から70年代に入った頃から、被爆者には乳がんとかが増えとるとかいいう話になってきて、そのカーブが白血病のカーブとクロス」し、白血病も「消えず、「完全に消えないで今に至ってる」。「がんのピークもすぐには来なくて、ずっと上がってって、1980年代も上がってって、90年代ぐらいでピークに入ったかなって。少し平衡状態になった。（中略）ところが完全に裏切られた」と述べられている。

全体としては、これは一生続くという感じが、段々はつきり

してきたのが、90年代から2000年になってからの最初の10年ぐらいですね。（中略）そうすると、ひよっとしたら、これは、人間に放射能が当たった場合に、白血病起こしたり、がんを起こしたりっていうのは、遺伝子をやっぱり傷害してそういう悪性腫瘍を起こすわけで、それは一生続いとるといふふうに見えないといけなくなってくるわけですよ。そこから生涯持続性ということが、これは間違いなくあるなということにみんな気が付き始めたわけですよ。

「生涯持続性」ということで発せられた言葉が、七五年という時間が経過しても変わらない、放射能の本質を厳しく弾劾していることは間違いない。このインタビューの章の最後は「これは終わらん」という言葉である。

実は、ここに登場された幾人かの被爆者代表「平和への誓い」の手話通訳を平和祈念式典で、私は担当している。思い出すままにあげれば池田早苗さん、井原東洋一さん、谷口稜睡さんである。いずれも鬼籍に入られた。戦後の七五年という時間を実感させられることである。

（二〇二一年八月三十一日 書肆九十九合同会社 四一五頁 二六〇〇円十税）